発達理論の学び舎

Back Number: Vol 110

Website:「発達理論の学び舎」

© YOHEI KATO 2019

目次

2181. 七日目のインターンに向けて

2182. インターン先のオフィスから

2183. 午前中の研究結果から

2184. 仕事についての再考

2185. MOOCのフラクタル次元に関する興味深い発見事項

2186. ツショル教授とのミーティングより

2187. 一日の最後に

2188. 今日の取り組み

2189. 科学・哲学・芸術

2190. 思念

2191. 自らの曲に喚起される事柄について

2192. 弥生初日の夢

2193. 神無月と神々が集う場所

2194. 知識体系の構築に向けて

2195. 冬の恵み

2196. 六歳のモーツァルトから

2197. 満月の見える寒い朝に

2198. 満月の下での小さな誓い

2199. 極寒の別世界から

2200. あのおじさんと自己超越

© YOHEI KATO 2019

2181. 七日目のインターンに向けて

今日はとてもゆっくりと起床した。一旦早朝の四時に目が覚めたのだが、少しばかり早いと思い、そこから再度寝ることにした。すると、次に目を覚ましたのは七時を少し過ぎた頃だった。起床してみると、外はすでに薄明るくなっていた。

昨日は突発的に雪が降ったが、今日は一日中晴天らしい。ただし、最高気温はマイナス1度、最低気温はマイナス7度という予報が出ている。八時を迎えた今の気温はマイナス4度と示されている。今日はあと一時間ほどしたら、インターン先のオフィスに向けて自宅を出発する。その時も随分と冷えているだろう。

インターンは今日で七日目を迎え、ちょうど半分の区切りとなる。これまでのインターンでは、分析に向けてデータを整理することや、MOOCのコンテンツの制作現場などを見てきた。折り返し地点を迎えた今日からは、よりデータ分析に焦点を当てていこうと思う。ちょうど一昨日にプログラミング言語のRをいじっていた時に、先週の金曜日に直面していた問題を解決することができた。そのため、今日からのデータ分析は比較的速やかになされると期待したい。

今日の分析の着眼点は、対象とするMOOCの各週の講義がどのようなフラクタル次元を持っているかを特定することである。その方法として「トレンド除去変動解析（DFA）」を使う。一昨日の時にこの手法に関するコードを書き、それを適用したところうまく結果が得られた。しかし、パラメーター設定が自分のもので正しいのかわからず、昨年にお世話になっていた、非線形ダイナミクスの専門家であるラルフ・コックス教授に助言を求める必要があるかもしれない。

偶然にも、以前コックス教授と学内で出くわし、その時に今の研究について少しばかり立ち話をしていた。その時にコックス教授は、時系列データの分析に非線形ダイナミクスの手法を活用する際にはいつでも相談に乗る、と述べてくれた。

とりあえず今日もう一度、DFAのコードを書いてみて、自分なりにパラメーター設定を考えてみようと思う。フラクタル次元を特定するためには、DFAのみならず、他の手法も存在しているため、そちらの方法を活用することも念頭に置いておく。今日は再びプログラミン言語と一日中向き合う日になりそうだ。フローニンゲン：2018/2/26（月）08:15

No.810: The Bed of the Sea

Our unconsciousness is fathomless like the depths of the sea. Have you ever experienced touching upon the bed of the sea in your consciousness? Groningen, 08:30, Tuesday, 2/27/2018

2182. インターン先のオフィスから

インターン先のオフィスに無事に到着した。今日は大学全体として追試の週であるから、月曜日の今日はキャンパス内にそれほど人がいない。オフィスのある建物は普段も十分に静かなのだが、今日は一段と静かであるように思える。

オフィスに到着し、隣の部屋のハンスに挨拶をした。ハンスはいつも九時から勤務をしているようであり、私よりも30分早く勤務を開始している。ハンスと小話をしたところで、一階に降りてコーヒーを入れた。

先週の月曜日とは異なり、今日はデータの整理に追われているわけではなく、とてもゆったりした形で一日の研究を始めることができた。今朝は起床時間が遅く、自宅でゆっくりとコーヒーを飲む暇がなかったので、いつもより大きめのコーヒーを注文した。コーヒー豆に関してはいつもと同じで、早朝は濃い味わいのものを選び、午後に購入するコーヒー豆は少しマイルドな味が抽出されるものを選ぶようにしている。コーヒーを片手に自室に戻り、少しばかり日記を書き留めてから今日の研究に取り掛かることにした。

オフィスに向かう今朝の道のりは、いつもと同じように近所の河川敷のサイクリングロードを通ることにしていた。今朝は快晴である一方、気温は寒い。マイナスの世界固有のピリッとした感覚を引き起こす寒さがそこにある。河川の表面は凍っており、朝日がそれに照りつけ、光り輝いている。その輝きは小さな美を体現していた。

耳が凍えそうになりながらも、河川敷を歩く私の気分はとても高揚していた。小鳥の鳴き声がどこからともなく聞こえてくる。風はほとんどなく、優しい太陽光が地上に降り注ぐ。そんな世界の中を私は静かな気持ちで歩き続けていた。

「幸福感」という言葉が自然と私の口からこぼれた。静かな世界の中を静かに歩くという、ただそれだけのことが、こうも幸福感をもたらすものなのだということに改めて気付く。

静かな世界の中で、静かにかつ確かに日々を生きていくこと。自分が望むことはそれだけなのかもしれない。

オフィスの外に小鳥の鳴き声が響き渡り、オフィスの中にはベートーヴェンの優しいピアノ曲が流れている。さて、これから研究に取り掛かることにしよう。フローニンゲン：2018/2/26（月）09:56

No.811: The Other Side of Our Life

I sometimes envisage the other side of this life. I suppose that it is a peaceful place for all of us.
Groningen, 08:49, Tuesday, 2/27/2018

2183. 午前中の研究結果から

午前中の研究がひと段落つき、昼食を買いにオフィスを後にした。キャンパス内にあるスーパーに行く道中、気温がひときわ寒く感じられた。間違いなく早朝の方が気温が低いと思うのだが、体感としては昼食前の時間の方が寒く感じられた。身が縮むような寒さの中を私は歩いていた。

今私がインターンとして所属しているのは、フローニンゲン大学の「教育イノベーションセンター」という部署であり、その部署がある建物と繋がっている経済学科の建物を通り、スーパーに向かった。経済学科の建物から一歩外に出た時、目の前に広がる河川が凍っていることに気づいた。二人の学生が凍った河川の上に立っており、その上に寝転んだりして遊んでいる。

かねてから噂を聞いていたが、本当に河川が凍るのだ。以前、教育学科のダニー・コストンス教授と立ち話をした時、昔は頻繁に河川が凍り、その上をよくアイススケートしたものだ、という話を聞いた。現地のオランダ人ではない私にしてみれば、オランダの冬は非常に寒さが厳しく感じられるのだが、コストンス教授に言わせてみると、ここ十数年の間に随分と冬の気温が高くなったそうである。

凍った河川の上に立つ二人の学生を見ながら、私も試しに河川の上に立ってみたいと思った。結局今回はその実験をすることをしなかったが、「試しにやってみる」という意識を何に対しても持って

いることを再認識した。スーパーで昼食を購入し、再びオフィスに戻っている最中、午前中の研究を振り返っていた。今日の午前中の研究は非常にはかどった。

嬉しいことに、私が立てていた仮説の通り、対象とするMOOCの各週の講義は、異なるフラクタル次元を持っていることが明らかになった。プログラミング言語のRを用いてフラクタル次元を特定した時、時系列データの表面的な外観を見ていてはわからないことがあると改めて思った。

フラクタル次元とは、時系列データに潜む構造特性であり、トレンド除去変動解析などの方法を使ってそれを特定することができる。時系列データに潜む構造特性を明らかにした時、次なる研究アイデアが思い浮かんだ。

現在ミヒャエル・ツショル教授と行っている研究が無事に完了すれば、今度はその新たなアイデアを検証してみたいと思う。簡単に述べれば、MOOCの講義データを基にして生成された時系列データと、学習者のオンラインコメントを基にして生成された時系列データのシンクロナイゼーションの度合いを測定していくものだ。

昨年学習した「交差再帰定量化解析（CRQA）」を用いれば、二つの時系列データがどの程度シンクロナイゼーションをしているのかを分析することができる。様々な観点から、二つの時系列データのシンクロナイゼーションの度合いを測定していくというのは非常に興味深い。

近い将来の研究に向けてメモを取り、これから午後の研究に取り掛かる。午後からは、午前中に特定されたフラクタル次元と、学習者の各週のテストスコア、そして各週の講義の完遂率との間に存在する相関関係を特定していく。その後、各週の講義が持つフラクタル次元が各週のテストスコアと完遂率にどれだけ影響を与えているのかを、回帰分析によって明らかにしていこうと思う。フローニンゲン：2018/2/26（月）13:08

No.812: Research Meeting

I had a meeting with my thesis supervisor. First of all, I reported the progress of my research. More specifically, I explained about the results of the initial data analysis. Then, we started to discuss the underlying theory of detrended fluctuation analysis (DFA).

I realized that I had to comprehend more details of DFA. By the next meeting, I'll read several articles about DFA to solidify my understanding. Also, I'll examine some articles on the features of good texts so that I can come up with more possible metrics.

Since I can work on a part of this research during the internship, I'll grapple with finding out another possible unit of analysis. So far, I defined it as sentence lengths, but I can expand it to paragraphs. Groningen, 16:36, Tuesday, 2/27/2018

2184. 仕事についての再考

今朝は五時半過ぎに起床し、六時前に一日の活動を開始した。七日目のインターンを昨日に終え、今日は午後からミヒャエル・ツショル教授の指導のもとに進めている研究に関するミーティングがある。その前に、午前中には日本企業との協働プロジェクトの案件に関する仕事が二つある。学術研究に従事することと社会的な課題へ関与することの二つが絶えず循環している。

昨夜もまた、自分が大学の教授になる意思はほとんどないことに気づいた。大学教授という地位に就くことによって、研究と実務以外のことに追われるのであれば、そのような地位に就く必要は全くないと思う自分がいる。身近にいる教授たちを見ていると、彼らが随分と他のことに追われていることに気づく。私は組織の中で彼らが担っているようなことを行う能力もなければ意思もない。

今後も大学機関に所属していながらも、教授職にはできるだけ就かないように生きていく工夫が必要だろう。これからの十数年間にかけて、本当にゆっくりとかつ継続的に探究を進めていき、その期間に二つか三つの博士号を取りたいという思いが強くなる。今のところ考えているのは、人間発達に関する博士号、ネットワーク科学に関する博士号、システム科学に関する博士号が候補である。それぞれを数年間かけて深く学ぶことに従事したい。その過程の中で、これまでの七年間のように、あるいはさらに力を注ぐ形で、獲得された知見を社会の課題へ絶えず活用していきたいと思う。

昨夜は就寝前に、科学論文執筆への疑いに対して新たな考えが生まれた。どうやら私は、科学論文そのものを執筆する意義については理解し、他の研究者からのフィードバックによって知を協働創造していくことの意義は十分に感じているようだった。しかし、学術機関に所属した場合、論文を内発的な動機ではなく、外発的な動機で書かせるように仕向けてくる見えない圧力のようなものが

あることが気掛かりである。また、論文ジャーナルのレビューアーの仕事の遅さにも強く疑問を持つ。当然彼らの中にも自らの意思でレビューアーを引き受けている者もいるだろうが、そうでない者もいるだろう。そうした意欲のないレビューアーに自分の論文を渡し、彼らからの杜撰なフィードバックを元に論文を何度も書き直すことに自分の時間を使いたくはないという思いがある。

数年前までは、学者が一般書を執筆することに疑いの目を持っていたが、今はそうしたことはない。むしろ、狭い学術コミュニティーの中で内輪の議論をするよりも、研究によって得られた知見を広く世の中に共有することの方が意義があるのではないかと最近思い始めている。それに相まって、学術論文の執筆に対する疑いは相変わらず晴れない。

現時点での考えは、博士課程での研究を元に一般書を執筆していくことと、そこでの探究で得られた知見を常に社会の具体的な課題の解決へ向けて適用していくという実務的実践に従事していくことが、自分の仕事の最適なあり方なのではないかと思う。フローニンゲン：2018/2/27（火）06:25

No.813: Big Data Hubris

While reading a book about network science, I noticed again the usefulness of not only system interventions but also network interventions for individual and organizational development. Also, my motivation to study MOOCs from network science perspectives arose again.

In the book, I found an insightful concept called “big data hubris” by David Lazer. “Big data” has been a recent buzz word, but we are inclined to overemphasize the power to utilize big data. In other words, we are blind to the dark side. Groningen, 20:03, Tuesday, 2/27/2018

2185. MOOCのフラクタル次元に関する興味深い発見事項

昨日の研究インターンを振り返ってみると、昨日も一日中プログラミング言語のRと向き合っていたように思う。午前中から午後にかけて、当初予定していた分析を全て順調に行うことができた。結果についても大変興味深いものが得られたのだが、統計的な有意性がほとんどなく、その結果が偶然の産物である可能性も残されていることに注意が必要である。

結果として出てきたのは、MOOCの講義をセンテンスの長さで定量化してみたところ、その時系列データに潜むフラクタル次元は、受講者の講義の完遂率とテストスコアとの間に負の相関関係があるというものだった。つまり、フラクタル次元が下がれば下がるほど、受講者の講義の完遂率とテストスコアが向上するという関係性を見出すことができた。結果の解釈についてはより慎重になる必要があり、もう一度フラクタル次元の定義について確認する必要があるが、今回の分析で言えば、センテンスの長さを尺度とした時系列データの変動性が激しい場合には、完遂率とテストスコアが下がる可能性があるという説明ができる。

対象としたMOOCは、七週間に及ぶものであり、各週の講義をセンテンスの長さで定量化した時、各週の時系列データは全てホワイトノイズという変動性が激しい特徴を持っていた。そうしたことからも、昨日得られた分析結果は、より調和の取れた変動性を持つ講義の方が完遂率とテストスコアを向上させるという当初の仮説を裏付けるものであった。しかし繰り返しになるが、統計的な有意性がほとんどないので、仮説を裏付けたとは決して言えず、依然として今回の結果は偶然の産物に過ぎないという可能性が残っている。

昨日の午前から昼食までの時間は、上記のような分析を行っていた。昼食後、また別の定量化基準で時系列データを生成することを行っていた。今度は、講義のトランスクリプトの中に潜む“stopwords”の数を元に時系列データを作っていくことにした。しかし、ここでもまたプログラミングコードを書くのに苦戦を強いられた。

様々な試行錯誤を経て完成したコードは、一見するとうまく機能しているように思えたのだが、よくよく元のデータと照らし合わせてみると、実際の文章の中に潜むstopwordsの数よりも一つ多く数えているものが紛れている。これはコンマを一個として数えてしまったために起こったのではないかと思われる。そこからコンマを除去するためのコードを書いて試してみたところ、それでも問題が解決しなかった。

先週の月曜日ほどに落胆したり、憤りを覚えることはなく、研究を離れている間にもこの問題について頭の片隅のどこかで考え、最適なコードのイメージをふとした時に考えることにした。金曜日にもう一度この問題に取り掛かり、その日に解決をしたいと思う。

© YOHEI KATO 2019

金曜日の早朝にまずは昨日得られた結果を簡易的なレポートとしてまとめ、それを昼食前か昼食後にスーパーバイザーたちに送りたいと思う。学術論文をジャーナルに送ることは腰が重いが、研究をすることそのもの、そして論文を書くことそのものには相変わらず大きな喜びと充実感がある。フローニンゲン：2018/2/27（火）07:11

No.814: A Dream Train

Our life is often compared to a road and a process of awakening from a dream. We may be always riding on a dream train on the road in our life. Groningen, 08:19, Wednesday, 2/28/2018

2186. ツショル教授とのミーティングより

昨日からフローニンゲンは寒さがまた厳しくなった。今日も雪が舞い、最高気温もマイナスとなった。だが、そうした中でも太陽の光が優しく地上に降り注いでいる時間帯があった。そうした時間帯はどこか心が温まり、ホッとした気持ちになる。

今もこの瞬間には、夕暮れ時の太陽の光が地上に降り注いでいる。同時に、雪もパラパラと待っている。天から降り注いでいるのは雪だけではなく、アガペーもあるかもしれないとふと思う。雪と共にアガペーがこの地上に降り注いでいる。

今日は先ほど、研究アドバイザーのミヒャエル・ツショル教授とのミーティングがあった。これまでは同じ研究グループのハーメンと三人でミーティングを行っていたが、研究フェーズが変わり、これからは個別のミーティングとなる。

いつもと同じように、大学のカフェテリアでツショル教授とミーティングを行った。冒頭に、今年の六月にロンドンで行われる国際学習科学学会での発表についてこちらから話をした。その後、ツショル教授から、以前提出した論文を少しばかり短くし、3/5までに修正後の論文を再度提出する必要があると言われた。これに関しては、ここからは全て自主的に全て自分で修正を行っていく旨を伝えた。

これまで随分とツショル教授から助言をいただいたため、ここからは自分だけで作業を進めたいと思っており、お互いの意向が合致して良かったと思っている。その後、現在取り掛かっている研究

について報告をした。研究インターンで先週の金曜日から今週の月曜日にかけて行った分析結果をまず報告した。ツショル教授もその結果には関心を示しており、また別の測定基準で分析を進めていく方向に落ち着いた。

その後、現在用いている「トレンド除去変動解析（DFA）」についてツショル教授からいくつか細かな質問があった。この手法に関しては、昨年受講したコースで学習しただけであり、実際の研究に本格的に活用したことはこれまでないため、この手法の背景理論については自分の理解がまだ浅かったように思う。ツショル教授からの質問に答えられないものに関しては、次回に持ち越すことにし、次回のミーティングまでにDFAに関するいくつかの論文を読み直し、背景にある数学理論について理解を深めていこうと思う。

その他にも分析の単位について話し合い、今現在はMOOCの講義のセンテンスを分析単位にしているが、それをパラグラフに拡張してみるアイデアについても話し合った。ここからの数週間は、DFAに関する理解を深めることと、分析単位の探索と選定に時間を充てたいと思う。フローニンゲン：2018/2/27（火）16:55

No.815: Conceptual and Philosophical Systems

I'll just focus on creating my own conceptual and philosophical systems in my mind. I'll do it for the sake of systems themselves. Philosophy attracts my being…Groningen, 21:56, Wednesday, 2/28/2018

2187. 一日の最後に

気がつくと今日も就寝時間まであとわずかとなった。先ほど、夕方のツショル教授とのミーティングで話題として取り上げた「トレンド除去変動解析（DFA）」について再度専門書と論文を読み進めていた。

夜もこの時間となると、なかなか集中力を高く保って文章を読むことが難しいが、枝葉末節には囚われず、重要な箇所のみを拾うことを意識しながら文献を読み進めていた。この手法の数式についてもう少し正確に理解しなければならない。

昨年、DFAを含め、非線形ダイナミクスの手法に関する専門家であるラルフ・コックス教授から一度一対一でじっくりとDFAを含めた諸々の手法の意味について教えてもらったことがある。その時の記憶が少し薄れており、当時書き残した図とメモ書きを再度読み返す必要がありそうだ。ただし、先ほど読んでいた論文の中にDFAの核となる二つのステップについて記述があり、それを何度か読むことによって、DFAの背後にあるメカニズムのイメージがより鮮明になった。明日は午後に少しばかり時間があるので、その時に、今日改めて取り出した論文を数本ほど読み進めようと思う。

今日は午前中の仕事の中で、少しばかりコミュニケーション上うまくいかないことがあり、その後もその件について考えていた。こちらの説明不足や関与の仕方にも不備があったと思うし、同時に相手側にも改善点があることは確かなようだ。人と人とが一緒になって仕事をする場合、どうしてもこのようなことが起こってしまう。今回は、明確にこちら側の考えを先方に伝えるという手段を取った。おそらく良い意味でお互いの考えを明確に表現し合うことができたため、次回の対話はより円滑になると期待している。

今日は改めて、日々の生活に安らぎを強く求める自分がいることに気づいた。これは自己防衛の一種なのだろうか、それとも自己を真に実現させるための道なのか、あるいは自己を真に超えていくための道なのだろうか。いずれにせよ、他者やこの世界との関わり方を絶えず考察し続けていく必要があることに変わりはないだろう。

いかに人や社会が見ていないところで仕事を継続させていくか。とにかく容易に人に触れることだけを避け、人が触れられない場所でライフワークを淡々と続けていくこと。そうした生活を実現したと思うし、そうした人生を死守したいと思う。ここ最近考えている策のいくつかを本当に実行に移す日も近いかもしれない。フローニンゲン：2018/2/27（火）21:50

No.816: Longing for Spring

Last week had a sunny day with no clouds. Although today is quite cold, spring is approaching.
Groningen, 06:43, 3/1/2018

2188. 今日の取り組み

今朝は六時前に起床し、六時半から今日の活動を開始した。書斎の窓から外を眺めると、六時半を過ぎた頃には、真っ暗な空がダークブルーに染まり始めていた。確かに日の出が早くなっていることを実感する。

明日からは三月となる。春が徐々に近づいてきていることを知る。春が徐々に近づいているにもかかわらず、今日は日中に雪が降るようだ。今の気温はマイナス8度である。今日は最高気温ですらマイナス6度までしか上がらないようだ。

この寒い季節の後には、生命の躍動を感じさせてくれる素晴らしい季節がやってくるだろう。おそらくこの街で暖かさを感じられる頃には、私の内側にも新たな季節がきっと訪れると期待している。

今日は午前中と午後にかけて、日本企業との協働プロジェクトの仕事が三つほどある。それに向けての準備は済んでおり、早朝にはまず、研究で用いる「トレンド除去変動解析（DFA）」についての論文に目を通そうと思う。この分析手法について、そして非線形ダイナミクスのその他の手法については、少しずつ理解を深めていくしかない。

知識体系の高度化には本当に時間を要する。今日専門書や論文を読んだからといって、それがすぐに研究で活用できるほどの知識にはならないのである。時間をかけながら、繰り返し繰り返しその項目を学習していく必要がある。

DFAに対する深い知識体系を構築することに関して、私はまだ点を作っている最中だろう。まずは無数の点を自分の中で構築していき、次にそれらを線として組み合わせていく。そこから面を作り、立体を作っていくというのはもう少し先のことになるだろう。こうした地道なことを、自分の専門領域に関しては継続していくしかない。

今の私の眼の前には、向き合いたいと思わせてくれる知識対象が無数に存在している。これは有り難いことだが、その分時間をかけて焦ることなく、継続的に知識体系を構築していくという地道なことを続けていく必要がある。今日の一つの読書もそうした地道な実践の現れである。

今日は夕方あたりに、「デジタルラーニングと学習環境」のグループ論文の執筆に取り掛かる。先週末に最初のパートの執筆を進め、数日間ほど文章を寝かしていた。この課題に一緒に取り組んでいる友人のハーメンも、昨日と今日がインターンで忙しかったらしく、本日この課題に再度取り組むという連絡が昨日届いた。

論文の出だし三分の一のドラフトをコースを受け持つミヒャエル・ツショル教授に提出し、私たちの論文の方向性についてフィードバックをもらう予定だ。ドラフトの提出に向けて、対象とするラーニングコンテンツの分析に関してもう一つだけ新たな項目として文章を書き足そうと思う。そして、全体をもう一度読み直し、誤字脱字などの修正を行い、あとはハーメンにバトンを渡そうと思う。フローニンゲン:2018/2/28(水)07:04

No.817: Behind Creative Activities

I was struck by Otto Rank's insightful comments on our creative activities. I noticed that I created something to immortalize my finite life. I may be engaging in making my creation transform death into life, even if I already know that the action would fail in the end….
Groningen, 13:42, 3/1/2018

2189. 科学・哲学・芸術

今日もこれから科学論文を読んでいく。しかもそれは、定量的な分析手法に関するものである。

非線形ダイナミクスを含めた複雑性科学の探究は、私を大きく惹きつけるものがある。この科学領域と密接に関係しているシステム科学やネットワーク科学への関心というのも非常に大きい。だが、昨夜改めて、こうした科学分野への探究を一生涯にわたって行えるのかというと、どうもそれについては疑問符が付けられた。

当然ながら長きにわたってこれらの領域を探究していくことは確かであろう。しかし、どうもそれらの領域を素朴に探究できるだけの自分の内側の成熟度というものが存在するのではないか、と思われたのである。数日前の日記で、システム科学やネットワーク科学に関しては、それぞれ一つずつ博士号を取っても良いほどに関心があると述べた。それは本当にそうだろう。しかし、それは現段階

での自分の気持ちであり、そしてそうした探究ができるのは自分の内的成熟度のあるところまでであると思うようになった。そのようなことを考えていると、昨年の三月にザルツブルグで国際非線形ダイナミクス学会に参加した時、シナジェティクスの創始者である物理学者のハーマン・ハーケン教授と話をする機会があったことを思い出した。

ハーケン教授はすでに90歳に達しておられたが、こうした学会に招待されるように、まだ学術研究を続けておられる。その時に印象に残っているのは、ハーケン教授は理論物理学者なのだが、現在の関心は徐々に哲学の方向に移っていると述べていたことである。その話を今ふと思い出していた。

科学の力と科学探究の意義については重々承知しているが、やはり私の本当の関心は哲学にあるのかもしれない。また、それに合わせて、欧州での二年目の生活が始まったのをきっかけに現れた芸術への関心も高まるばかりである。科学的な探究を愚直に続けることにはいつか限界がありそうだが、哲学と芸術の探究であれば一生涯をかけて取り組むことができそうな気がしている。

自分の探究の方向がどのように動いていくのかは本当にわからない。ここ数年、あるいは数十年にわたっては科学研究にも力を注いでいくことになるだろう。それと並行して、どうしても哲学や芸術の探究を行いたいと思う自分の内側には、まだ明らかになっていない自らの特性のようなものがある気がしてならない。

薄紫色の早朝の空がやってきた。遠くの空はライトパープルに染まり、手前の空はライトブルーの様相を呈している。数羽の鳥が早朝の空を舞っている。今この瞬間に雪が降りそうな気配はなく、いたって静かな朝だ。

これから今日一日の活動を本格的に始めることにしよう。とにかく、こうした研鑽に次ぐ研鑽と絶え間ない社会実践が共に行われる修道的日々を末永く送りたい。フローニンゲン：2018/2/28（水）07:23

【追記】

科学研究のみに邁進できるような純朴な自己はもういなくなった。

上記の日記では、そのような自己がいなくなることは、その時から数年後、ないしは数十年後にやってくるであろうと書いていたが、その翌年に早々とやってきた。こうした予測不可能性こそが、人間発達の要諦なのだと改めて思う。フローニンゲン：2019/1/22（火）08:52

No.818: Modulation

Finally, I could grasp how to apply the technique of modulation. So far, I've not been able to use it intentionally. Yet, I could suddenly comprehend a part of the technique. In fact, I applied it to a new piece of my work. From here, I'll deliberately utilize the technique to sophisticate my understanding and skill of modulation. Groningen, 20:44, 3/1/2018

2190. 思念

今日は早朝に二つの日記を書いたきり、夕食後のこの時間帯まで文章を書くことがなかった。その背景には、現在進めている複数の協働プロジェクトの案件とフローニンゲン大学でのコースワークが重なっていたためである。

夕食を摂り終え、今少し文章を執筆する時間ができた。先ほど夕食を摂りながら、独り言を話すかのように、あれこれと自分がこの現代社会に対して抱いている課題意識について考えを巡らせていた。実際には本当に独り言をブツブツとつぶやいていたように思う。一つは、現代人のリテラシーというものが根本的に脆弱なものになっているというテーマだった。

インターネットの技術の進展とSNSの発展により、この社会で蔓延するテクストの絶対量は圧倒的に拡大した。しかしながら、それらのテクストは、真に私たちの人生を豊かにしてくれるほどの質を持ち合わせているのかについては、大きな疑問が残る。

テクストの質の劣化によるリテラシーの脆弱化について、私は独り言を何度も繰り返し述べていた。私たちの成熟を促してくれる良質なテクストは、この世界に必ず存在している。現代社会に流通する膨大な情報から見れば、それは圧倒的に少数だと言えるかもしれないが、そうしたものが存在していることは確かだと思うのだ。

現代社会に蔓延するほとんどのテクストは、私たちの欲望を刺激するか、もしくは低次の欲望を満たすための役割しか果たしていないのではないか。どうしてあれほどまでに、そのようなテクストだけと向き合おうとするのだろうか。おそらくそう仕向ける何かがこの社会に存在しているのだろう。

自分の人生を真に豊かにしてくれる良質なテクストを自分なりに探す必要性がますます高まっている世の中を私たちは生きている。

夜の八時を迎える今、辺りはすっかり闇に包まれている。今日は結局雪が降らなかった。

今の気温はマイナス8度であり、今日は一日を通してマイナスであった。しかし、今日は一回も外に出ていないので、外の寒さがいかほどであったかはわからない。

感覚から出発すること。自らの体験から出発することの重要性について先ほど考えていた。

私たちの人生を豊かにする上で欠かせないのは、おそらく良質なテクストに触れることであり、同時に自らの感覚世界を豊かにしていく直接体験を積むことだと思う。

欧州での生活を始めることによって、私はいかに自らの直接的な感覚と体験から出発することが大事かを理解するようになった。それは単に直感に依存するのではなく、直感そのものが生まれる身体感覚そのものに気づきを与えて思考を進めていくことの大切である。一見すると相容れないように思える言語と感覚の双方を私が大切にしているのは、自らが欧州の土地で日々体験していることが蓄積されたことによってもたらされたものなのかもしれない。

徹底的に自らの言語と感覚に基づいて出発すること。これは今後も大切にしていく生き方に違いない。言葉と感覚と出発が、私たちの人生を作っているのだから。フローニンゲン：2018/2/28（水）19:52

No.819: Open Our Arms

How often do you feel that you want to open your arms to identify with this vast world? A new day is always welcoming us, entirely opening its arms. Groningen, 07:48, Friday, 3/2/2018

2191. 自らの曲に喚起される事柄について

日々作曲をし、生み出された曲に対して、その曲から喚起された感覚や考えなどをメモとして残している。それらのいくつかを読み返してみると、時に大変興味深い記述をしていることがあることに気づく。脈絡はないと思うが、少しばかりそれらを列挙する形でここに書き留めておきたい。

一つは、私たちの人生と道、そして夢との関係性を示唆する曲についてである。私たちの人生は、よく道に喩えられることがある。同時に、私たちの人生は、夢から覚醒していくプロセスであるとも言われる。

ある曲を作っていた時に、私たちの人生という道の上には、夢という列車が絶えず走っており、その列車に乗り降りを繰り返しているのが私たちなのではないか、ということを考えていた。夢という列車は一つではなく、ある夢から覚醒した際にもまた別の夢が待っていることから、列車は複数存在している。私たちは夢からの覚醒を無限に繰り返していくことを宿命づけられた存在なのかもしれない。

それが、「夢汽車」という自分が作った曲を聴いていた時に考えていたことである。この曲に関係して、最近「宮廷舞曲」という曲が生まれた。それを自分で聴いている時に、私たちは自らの意思に基づいて日々踊っているのか、それとも単に踊らされているだけなのだろうか、ということを考えていた。結論は言わずもがなであり、後者だろう。そこから、一つの夢のような舞台の中で自分が踊っているかのような感覚に陥るときがあることを思い出した。

今この瞬間に起こっている夢に対して自覚的になっていながらも、踊り始めた踊りは続けられていく、というような状況を自分の日々の中に見いだすことができるときがある。真に夢から覚め、真に自分の踊りを自らの意思に基づいて踊る日は来るのだろうか。そのようなことを考えていた。

外は完全に闇に包まれた。外界に闇が訪れたとの同様に、これから就寝を迎えると、内側にも闇がもたらされる。

夢を見る無意識の世界は、深海のように深い。そこでの闇は、今目の前に映る外の世界の闇よりも深いだろう。そして、夢を見ない眠りの意識の世界はもっと深い。そこはもしかすると、光も闇も存在

しない場所なのかもしれない。そこは意識の基底と呼んでも良いものかもしれない。そうした意識の基底に触れる体験を自覚的にすることが多くなった。

これは矛盾しているようだが、覚醒意識の状態で、本来夢を見ない深い眠りの世界でしか触れることのできないものに触れている感覚を持つことがある。そうした体験が日々静かに積み重なっていく。フローニンゲン：2018/2/28（水）20:15

No.820:Today's Work

I just arrived at the internship office. I grabbed a cup of coffee and started today's work.

First of all, I want to clarify what I will do today. The first task is to explore another data analytic method that I did not try last week. The purpose of the two methods is the same in that both of them detect fractal dimensions of time-series data.

I will make sure of no difference between the results derived from those methods. After the comparison, I will write a brief summary report for my supervisors. This report summarizes the results of the data analysis that I have conducted so far. The total amount would be around three or four pages including graphs and charts. If I finish writing it early, I will grapple with applying another metric──stopwords──to quantify the data. Groningen, 09:44, Friday, 3/2/2018

2192. 弥生初日の夢

今朝は五時に起床し、五時半から一日の活動を開始させた。今朝方、風がとても強く吹いており、一瞬嵐の中に自分がいるのかと錯覚するぐらいであった。今はもう強風は吹いておらず、穏やかな闇の世界が外に広がっている。それにしても今日は本当に気温が低い。現在の気温はマイナス8度である。明日はインターンのためにオフィスに行く必要があるのだが、自宅を出発する九時の気温は今と同じぐらいのようである。こうした寒さの中にあっても、着実に自分のライフワークを前に進めていこうと思う。

昨夜は夢の中で、自分よりも遥かに膨大な量の探究を継続している老人と出会った。

その方が一日に自らの探究領域と向き合う時間は、私のそれを凌駕しており、夢の中で見た、その方が書斎に向かっている姿が今も鮮明に脳裏に焼き付いている。

この夢のシーンの前に、何人かの知人と共に、東京の下町で昼食を摂ろうとしていた。とても古びた定食屋に入ると、そこはすでに客で一杯だった。そのため、私たちは店長に話しかけ、少しばかり歩いたところにある同じ系列の店舗の混み具合を確認した。どうやらそちらの店は空いているようだったので、私たちはそちらの店に向かった。

店に到着する間際、この辺り一帯が母方の祖母の家の近くであることにふと気づいた。下町の狭い路地をくぐり抜けながら歩いていると、祖母が住むマンションが右手に見えた。私は友人の一人に、「あぁ、あそこに祖母が住むマンションがある」とつぶやいた。すると友人は、「昼食の帰りに立ち寄ったらどうだ？」という問いを投げた。私はその問いに対して、「立ち寄りたいのは山々だが、今は顔を見せられない理由がある」と述べた。

祖母が住むマンションが路地に建つ家々の陰に隠れ、もうマンションは見えなくなった。すると、定食屋に到着した。夢は静かにそこから場面をまた変えていった。

書斎の窓から外を眺めた時、一台のバスが通りを走り去った。早朝の六時であるため、バスの乗客はいないだろうと思っていたのだが、数名ほど乗客がいた。彼らの一日の活動の開始は非常に早い。今日は午前中に協働プロジェクトの案件に関する仕事が一つ、そしてもう一つの仕事として、お声掛けいただいた講演にオンラインを通じて登壇させていただく。

今日からいよいよ三月となり、諸々の春の到来を心待ちにしている。フローニンゲン：2018/3/1（木）06:11

No.821: Analysis Report

I summarized the results of the data analysis that I have done so far. In particular, the report consists of: (1) purpose of the report, (2) procedure of the data analysis, (3) results, and (4) practical implications. I shared the report with the three supervisors at the internship site.

Next Monday, I will orally report the results to one of the supervisors. Also, I plan to include this report as one of my portfolios. Next week, I will conduct the same analysis with different metrics such as course-related concepts and stopwords. Groningen, 17:31, Friday, 3/2/2018

2193. 神無月と神々が集う場所

三月は「弥生」とも呼ばれることを、先ほどふと思い出した。そこで旧暦の名称について少しばかり調べてみた。私が生まれた誕生月は10月であり、それは「神無月」と呼ばれる。神なき月。その由来についても調べてみた。どうやら日本古来、この月には日本津々浦々の神様が出雲大社に集まり、出雲以外の地域に神様がいなくなってしまうのでそのような名称になったらしい。

一方で、出雲には数多くの神様が集まることから、出雲地域では10月を「神在月」と呼ぶとのことである。神無月の由来に関する知識は些細なものかもしれないが、その由来そのものに対して思いを巡らせてみると、少しばかり自分の中にざわつくものがあることに気づく。それが何かは今はわからない。

神々が集う場所。そうした場所はおそらく日本の出雲のみならず、その他にも世界中に存在しているような気がしてならない。そして私は、そうした場所に導かれながら世界各地を遍歴しているように思えてくる。この巡礼の旅はまだ当分終わりそうにない。

欧州での生活が始まって以降、私は特に生の向こう側の世界について想いを馳せることが多くなったように思う。それは彼岸への憧れからもたらされるというよりもむしろ、自らがいつか辿り着く場所に対する自然な関心からもたらされると言っていいかもしれない。

彼岸はきっと安らかな場所なのだろうという思いが湧き上がる。昨夜通過した、夢を見ない深い眠りの意識の状態と同じように、そこは一切が不在かつ有在の静寂な場所なのだろうと思わずにはいられない。

今日は、研究で用いる「トレンド除去変動解析（DFA）」に関する論文をいくつか読んでいく。昨夜も二本ほど論文を読んでいた。この手法に関する論文はどれも非常に専門的であるから、一度や二度読んだところでは多くを理解することはできない。そもそもそれらの論文を今回読む目的は、DFA

の背後にある数学的な処理手続についての理解を深めることにあるため、その目的に合致した箇所を中心に読み進めることが賢明だろう。そうでなければ、DFAを取り巻く諸々の周辺的な論点の量に圧倒されてしまい、一向に理解が進んでいかないだろう。今日は、当初の目的に合致する箇所のみを取り上げ、そこを丹念に読んでいくことを意識しようと思う。

こうした科学論文を読むことのみならず、今日はオットー・ランクの“Art and Artist: Creative Urge and Personality Development (1932)”をいよいよ読み始めたい。目次に印をつけた箇所から読み進める。

昨夜もまた、いつか哲学的な探究をより本格的に行いたいという考えが湧いていた。独学の形で、自分の関心分野に関する哲学領域を探究することに合わせて、いつか哲学を学術機関に所属する形で体系的に探究していきたいという考えがある。もしかすると、三つ目や四つ目の博士号として哲学探究を進めているかもしれない。哲学探究は、それほどまでに自分を惹きつける何かがあるようだ。フローニンゲン:2018/3/1(木)06:35

No.822: Our Intrepid Souls

I believe that our souls are fearless, audacious, and adventurous. All of us have them, or we are the souls. Groningen, 08:31, Saturday, 3/3/2018

2194. 知識体系の構築に向けて

たった今昼食を摂り終え、少しばかり文章を書き留めてから午後の仕事に取り掛かりたいと思う。昼食を摂りながら、先週の爽快な冬の空が広がる晴天の日について思い出していた。

今この瞬間も、冬の青空が広がっていることに変わりはない。しかし、今日はいかんせん寒さが厳しい。

昼食前に、日本とつないだオンラインの講演に登壇させていただいた時、今日の東京の季節感について話を聞く機会があった。どうやら東京は春一番が吹き、今日の気温はとても暖かかったそうだ。フローニンゲンでは、太陽の光は徐々に春らしくなっているのだが、気温は相変わらず厳しい。

今日はこれから、早朝に読み進めていたオットー・ランクの書籍の続きを読むことにする。400ページを越す分厚さを持っているが、各ページの分量はそれほど多くない。本書は、ランクが心理学の観点から芸術や芸術家を論じたものであり、参考となる記述が随分と多い。自分自身の芸術論を構築していく上で、非常に多くの洞察をもたらしてくれるように思う。

早朝に読み進めていた時には、何箇所にもわたって印とコメントを付していた。それらの箇所は今後の自分の思想を育む上で大きな助けとなるだろう。可能であれば、目次を眺めた時に印を付けた全ての章を今日中に読み通すことができたらと思う。

欧州での生活を始めて以降、いくつもの個人的な課題というものが浮き彫りになってきたのだが、その中でもいかに知識体系を自己の内側に構築していくかは、今の私にとっても継続している課題である。学術研究をしようにも、協働プロジェクトに従事しようにも、作曲をしようにも、知識体系があまりにも脆弱すぎるということを頻繁に実感する。これは嘆いてもしょうがないのであるが、その事態についてはよく嘆きの声が漏れる。

おそらく、知識の性質と知識を獲得するプロセスそのものを見直す必要があるだろう。その点に関して、今所属している実証的教育学のプログラムは、学習理論や教授法を含め、実践に資する知識をいかに獲得していくかのプロセス対して随分と多くの示唆を私に提供してくれているように思う。

一つ今の私の傾向として好ましいのは、純粋に書籍や論文を読み続けるような日々を過ごしているわけではなく、それよりもむしろ、日々絶え間なく表現活動に従事しているということだろう。具体的には、学術論文の執筆であり、日記の執筆であり、曲を作るということだ。ここからはおそらく、知識というものに接する瞬間、すなわち書籍や論文に触れた時の自己のあり方とそれへのアクションを変化させていくことが重要になるだろう。

ランクの書籍をある程度読み終えたら、今度は全く分野が異なるが「トレンド除去変動解析」の手法に関する学術論文と、作曲上のフーガの技法に関する専門書“The Study of Fugue (1958)”を読み進めていきたいと思う。その際に、知識との向き合い方に関して今の私が考えている最適な方法を適用してみたい。フローニンゲン：2018/3/1（木）13:24

No.823: Scaffolding Effect

Whenever I compose music, I always refer to a music score of one of the previous great composers. I must say that it can play a significant scaffolding role for me. It stimulates my music mind and helps me to create music.

I'll continue to refer to their music scores at least for three or four years from now until I compose around one thousand works. I'll then start to walk on my own path. Groningen, 08:49, Saturday, 3/3/2018

2195. 冬の恵み

繰り返しになるが、今日は本当に寒い一日である。午後の仕事を少し行ってから、行きつけのチーズ屋に足を運ぶことにした。運動がてら、ランニングをしてチーズ屋に向かってみると、気温の低さのみならず、冷たい風が立ちふさがった。耳が凍ってしまうかのような寒さがそこにあり、途中に見た河川は完全に凍っており、そこはスケートリンクと化していた。

15分弱走ると、チーズ屋に到着した。今日はチーズ屋の二人の女性店主が揃って店を切り盛りしており、「今日は寒いでしょう？」と笑いながら質問された。それに対して私は、「相当に寒いですね」と答えた。すると、店主は大きな笑い声を上げながら、「私たちですらも今日は寒いわよ」と述べた。

現地のオランダ人でさえも寒いと感じる寒さが、フローニンゲンの街を包んでいた。毎週一度このチーズ屋を訪れるため、私は二人の店主のどちらも共によく知っており、いつも少しばかり世間話をする。とにかく今日は寒さの話で持ちきりだった。「寒い」というただそれだけの現象も、それをいかに私たちが受け止めるかによって、冒頭の会話のようにお互いを微笑ませる力がある。極度の寒さを話題として取り上げ、それによって笑みがこぼれるのであれば、こうした寒さも感謝すべき対象であり、自然の恵みだと言えるだろう。

毎週必ずこのチーズ屋で一週間分のナッツとチーズを購入しているためか、先週は嬉しいことに、毎回貯めていたポイントが最大値となった。今日はそのポイントとチーズとナッツの詰め合わせを交換した。いつも私が購入するチーズが置かれている棚とは異なる場所に置かれている三種類のチー

ズとナッツの詰め合わせを受け取った。二人の店主にお礼を述べ、チーズ屋の外に出てみると、そこには寒さの広がる世界が再び待っていた。しかし、二人の店主との会話もあってか、その寒さは先ほどとは異なるように感じられた。チーズとナッツの入った袋を片手に、私は再び走り出し、自宅に向かった。

冬の中に潜む暖かさを実感するような午後であった。冬の恵みというのは、実はそこに様々な暖かさが存在していることを私たちに教えてくれることなのかもしれない。フローニンゲン:2018/3/1(木)15:56

No.824: Thousand of Articles

Again, I'll endeavor to read abstracts of thousand of articles to cultivate my understanding of the academic fields by which I am intrigued. Close examination of each article should come later. Groningen, 11:14, Saturday, 3/3/2018

2196. 六歳のモーツァルトから

夕食を摂り終え、これから一日を締めくくるべく、小さくライフワークを前進させていく。夕食前に、作曲上のフーガの技法に関する専門書を読み進めていた。

早朝に書き留めていたように、実践に資する知識体系をいかように構築していくかを意識することが今の自分には特に求められており、そのあたりに気をつけながらこの書籍を読み進めていった。知識のための知識というのは無益でしかなく、知識というのはとにかく実践に資する形で獲得していくことが重要である。そうした意識を強く持ちながら、普段目を通してしまいがちな些細な事柄に囚われることなく、実践につながる本質的な記述を丹念に読み進めていった。

この書籍を読む前に、少しばかり作曲実践を行っていた。具体的には、モーツァルトが六歳の時に生み出した作品に範を求めていた。正直なところ、最初に楽譜を開き、今日はこの曲を参考にしようと思った瞬間には、この作品がいつ作られたものなのかを気にすることはなかった。この作品を参考にする前に、一度実際に聴いてみようとしたところ、作品の制作年が書かれており、モーツァルトの生誕年から逆算すると、この作品が六歳の頃に作られたものであることがわかったのである。

曲を聴き、実際にその楽譜を眺めた時、これを六歳の時に生み出すというのは、やはりモーツァルトが傑出した才能の持ち主であったことがわかる。同時に、モーツァルトといえど、この作品段階から作曲家としての歩みをスタートせざるをえなかったのだということもわかる。つまり、この時期の作品は早熟の才能の閃きが具現化されているが、それは決して熟達した作曲家が具現化させる表現物ではないということである。モーツァルトを含め、過去の偉大な作曲家の作曲技術の発達過程というのは、ぜひとも着手してみたい研究テーマである。

有り難いことに、楽譜というデータがすでに大量に存在しており、それをどのように定量化するべきかの方向性についても見えているため、あとはいつどこで本格的にそうした研究に乗り出していくかだけだろう。もし仮に、この秋から米国の大学院に客員研究員として所属することになれば、それをきっかけとしてぜひともこうした研究に着手したい。その際には、科学的に作曲技術の発達プロセスを研究し、彼らの作曲思想を哲学的に研究することも行ってみたいと思う。

今日はこれから「トレンド除去変動解析」の論文を少し読み進め、それが終われば就寝に向けて、再度作曲実践を行う。科学、哲学、芸術の実践的探究に明け暮れる日が今日も終わりに近づき、再び同様の明日がやってくる。フローニンゲン：2018/3/1（木）19:32

No.825: “Art and Artist: Creative Urge and Personality Development (1932)”

I completed reading Otto Rank’s “Art and Artist: Creative Urge and Personality Development (1932),” which was very profound to me. It encouraged my creative activities, and it gave me a tremendous amount of inspirations. I’ll read it again in my future. Groningen, afternoon, Saturday, 3/3/2018

2197. 満月の見える寒い朝に

昨夜の就寝前は、普段は暖かい部屋の中すら寒く感じた。ここ数日間のフローニンゲンの気温は異常なほど低くなっている。今朝も起床直後に、その寒さに驚いてしまうほどであった。今日はインターンがあるため、早朝の九時に自宅を出発する必要がある。その時の気温はマイナス8度のようだ。この寒さは今日明日までが特にピークのようであり、なんとか今日の寒さを乗り切りたい。

今日は早朝の五時に起床した。書斎の窓の外から空を眺めると、満月が神々しいほどに白く輝いていた。美しい円を描く満月は、その輝きと共に幻想的なエネルギーを放っているかのように思えた。

とにかく起床直後の気温が低かったので、部屋の中の暖房もできるだけ温度を高くした。身体を温めるために、普段よりも熱いお湯を湯船に張り、ゆっくりと浸かった。

今日はこれから八日目のインターンが始まる。今日はオフィスに到着すると、いつものように一階に降りてコーヒーを購入する。その後、月曜日に行っていたデータ分析に追加して、別の分析手法をR上で適用しようと思う。すでにその手法についてはRのコードを書いており、試しに断片的なデータに対してそれを適用してみた。

今日は本格的にすべてのデータに対してその手法を適用し、月曜日に得られた、他の分析手法を適用した時の結果と比較してみようと思う。おそらくこの作業は昼食前に終わるだろう。遅くとも昼食までにこの作業を終わらせたい。研究対象とするMOOCの講義が持つフラクタル次元について、二つの分析手法を比較し終えたら、その結果も含めたレポートを作成したい。これは本格的なレポートではなく、インターンのスーパーバイザーを含めた関係当事者への報告用の資料である。それを午後から作成しようと思う。

レポートに盛り込む項目は多くなく、何をどのように盛り込んでいくべきかについてもすでにイメージがあるため、レポートの作成には数時間を見積もっておけばいいだろう。仮にレポートの作成が早く終わったとしても、次の研究フェーズにはあえて進まないようにする。それよりも、レポートの内容に誤りがないかを見直すことや、今日の朝に行う分析結果と月曜日の結果を再度検証することに時間を充てたい。早くもインターンの期間は半分を過ぎ、来週の月曜日からまた異なる定量基準を基にしたデータに対して同様の分析を行っていこうと思う。

それにしても今日は満月が本当に綺麗だ。フローニンゲン：2018/3/2（金）05:56

No.826: A Dancing Dwarf

All of us are equally a dwarf living in a diligent way.

One dance induces another, which moves this world. I sincerely wish that a circle of wholesome dances expands in our society. Groningen, 08:25, Sunday, 3/4/2018

2198. 満月の下での小さな誓い

蠱惑的に輝く満月を眺めながら、ふと昨夜浮かび上がってきた思念について考えていた。以前から私は、人は自ら紡ぎ出す言葉で膨大な量の文章を創出した時、その人間の認識世界はいかように変容するのか、ということに関心を持っている。

その関心がふとしたきっかけで昨夜も顔をのぞかせた。具体的には、人間が一億文字を自らの言葉で紡ぎ出す時、その人間の認識世界の特性はどのようなものに変化するのだろうか、ということについて強い興味を再度喚起されたのだ。これは他者を対象にするというよりも、自分を対象に、つまり自らを実験台として行おうと思っている試みであった。しかし、一億文字を生涯にわたって書き残すというのは想像以上に難しい。

以前大学のキャンパスに向かって歩いている時に、仮に一億文字を生涯にわたって創出するのであれば、毎日四千字の文章を執筆したとしても、80年以上の時間がかかることがわかる。書籍に換算すると、月に単行本一冊を執筆するペースで80年間毎日文章を書き続けることが要求される。そうした計算をしてみると、その結果に対して驚くというよりも、自らを誘惑するような何かがその試みの中にあることに気づく。自らの人生を綴り、日々の出来事から喚起される思考や感覚、そして日々に見出された新たな意味をつぶさに書き留めていくことへの関心は増す一方である。

早朝の六時を迎えた頃、郵便配達員の人が道路を自転車で走っている姿を見かけた。その人以外は道路に人はいない。このような寒い中でも、誰にも見られないところで自らの仕事に従事している人の存在に気づく。今地球の反対側や大きな時差のある日本では、無数の人たちが自分の見えないところで仕事に従事しているのだろう。

一億文字を書き残すという試みの裏には、当然ながら自分の言葉で生み出された巨大な言語構築物がいかようなものになるかを眺めてみたいという気持ちがあることは確かだろう。さらには、日々の学びが風化しないように、そして自分の人生が風化しないように、絶えず文章を書き続けることには

大きな意味があるように思う。一方で、この試みの最奥にある自らの欲求についても光を当てる必要があるかもしれない。

昨日読み進めていたオットー・ランクの書籍の中に、人間には、有限なものを無限に変換させようとする衝動が内在しているとの記述を見かけた。とりわけ、何らかの創造行為に従事している人は、多かれ少なかれこうした衝動をもとに表現行為を継続させているという記述と出会った。私はハタと、以前から自分の中に渦巻いている永遠性を希求する思いとこの衝動を照らし合わせた。そして、こうした思いの背後には、有限な生を不死のものにするという試みに盲目的に従事している自分がいたことに気づかされたのである。

「盲目的な不死化」現象は、もしかすると私のみならず、多くの人の中で見られるものかもしれない。下手をすると、日々の全ての行為というのは、有限な生と死からの逃避であり、盲目的に生を無限なものにしようとする行為だと言えるのではないか、という考えが脳裏をよぎる。

ひょっとすると私が一億文字を書き残すことの中に蠱惑的なものを感じているというのは、巨大な言語構築物を生み出す過程の中で、なんとか盲目的な不死化から脱却し、意識的な不死化の道、つまり膨大な文字で作られた巨大な言語構築物を意識的に永遠のものにしようとする意思が芽生えているからかもしれない。

満月の見える早朝、小さな誓いとして、巨大な言語構築物の創出に向けた一歩を絶えず踏み出し続けて行こうと思った。フローニンゲン：2018/3/2（金）06:26

No.827: Journaling

I noticed that I did not keep an English journal very much yesterday, probably because I kept a relatively large amount of Japanese diaries. Writing is an indispensable practice in my daily life to reflect upon myself and my life. It always provides new findings and different questions with me. Both of them enrich the quality of my life. Groningen, 07:37, Monday, 3/5/2018

2199. 極寒の別世界から

先ほど無事にインターン先のオフィスに到着した。「無事に」と思わず言葉を付け足してしまったのは、あまりにも外が寒く、冷たい風にさらされ続けていたからである。

自宅を出発したのは午前九時を迎えた頃だったが、その時の気温はマイナス7度だった。太陽は出ているのだが、いかんせん空気が張り詰め過ぎている。そうした中を、少しでも早く体を温めるために、いつものように最初の10分ほど軽く走っていた。いつもは10分ほど走れば体が温かくなるのだが、今日は一向にそのような気配がなかった。冷たく強い風が吹くたびごとに、耳が凍ってしまうのではないかと心配してしまうほどであった。

そんな過酷な寒さの中、いくつか興味深い光景を目にした。一つは、一人の父親が小さな子供を前に乗せて自転車を運転している光景である。その光景そのものよりも、ふと父親が自転車を止め、何かを地面から拾い上げていたことが印象に残っている。どうやらそれは、寒さをしのぐためにかぶせていた子供の帽子のようであった。帽子を拾い上げた父親は、それを再び子供の頭にかぶせた。今度はおそらく深々とそれをかぶせのだろう。その父親もこれから働きに出かけるのだろうが、非常にラフな格好をしていた。

日本では母親が自転車の前や後ろに子供を乗せて早朝に運転する姿を見かけることがあるが、オランダでは父親がそれを行っている光景をよく目にする。今のインターン先でMOOCチームのリーダーを務めているトムには、双子の子供がいるようであり、勤務は週に四日、しかもそのうちの一日は午前までの勤務である。働き方にせよ、子育ての仕方にせよ、日本とオランダとでは随分と異なることを改めて知る。この寒い中、自転車を懸命にこぐ父親の姿はもう見えなくなった。

インターン先のオフィスに向かう道は、いつものように、河川敷のサイクリングロードである。今日改めて河川を眺めてみると、見事に凍結していた。冬季五輪でオランダを始め、北欧諸国が強い理由というのは、こうした環境要因によるところも多分にあるだろう。小さい頃から凍った河川の上をスケートしていれば、自然とスケート感覚が養われ、高度なスケート技術を獲得するための土台のようなものが培われるにちがいない。

適宜走りながらオフィスに向かっている都合上、通勤には比較的時間に余裕がある。そのため、私はサイクリングロードの途中で足を止め、凍った河川の上に立ってみることにした。これは先週から試そうと思っていたことであり、今日その決心がついた。河川は本当に凍っており、私が上に乗っても氷が壊れることはなかった。

氷の上に立つことに関して、何か事前に仮説を立てていたわけでもなく、何かを検証しようと思っていたわけでもない。単純に、凍った河川の上に立つという直接体験を味わってみたいという思いだけがあった。

氷の上に立って周りを見回してみると、そこには静かな世界が広がっていた。サイクリングロードを通る人もほとんどおらず、とても静かであったが、氷の上の世界はもっと静かであった。

この世界には別世界が至る所に遍満しているのだということを知る。今いるインターン先のオフィスもまた別世界だろうし、オフィスの窓から見える外の世界もまた別世界だろう。フローニンゲン：2018/3/2（金）10:02

No.828: Premonition of Spring

It has been very cold in Groningen for the past couple of weeks. Although I feel a premonition of spring today, it seems that a cold day still continues. Groningen, 08:36, Monday, 3/5/2018

2200. あのおじさんと自己超越

冷たい木枯らしが外の世界に吹き荒れている。風がゴーゴーと吹く音が聞こえて来る。

今日はサンサーンスのピアノ曲を聴きながらオフィスで研究を進めていくことにした。これから午前中の研究に取り掛かろうと思うが、その前にまだ書き足りない何かがあるような、つっかかりが自分の内側にあることに気づく。

絶えず文章を書くという実践的生活に関して、今後はより量と質が充実してくることを願う。絶えず曲を作るということに関しても全く同じであり、両者の絶え間ない創出実践は本当にまだ始まったばかりなのだと思う。これから数年間かけて、それらの実践生活の基盤をゆっくりと構築していきたい。

それらはこれから80年、あるいは90年続けていくライフワークの一端を担うであろう極めて重要なものなのだから。

自己規律と健全な自己批判を絶えず伴わせた形で実践を続けていく意義。それについて、今日はオフィスに向かう途中にもう一つ重要な光景を目にしていたことを思い出した。

オフィスに向かうサイクリングロードの最後の分岐点には小さな公園がある。その公園には、スポーツジムに置かれているようなレッグマシーンのようなものが何台か地面にポツリと置かれている。それは足を前後に振るものと、左右に振るものの二種類である。私がオフィスに足を運ぶのは毎週月曜日と金曜日だけなのだが、その日の同じ時間に、決まって同じ中年男性がそのレッグマシーンを使ってトレーニングをしている。

今日もこの極寒の中、暖かい格好をしてニット帽をかぶりながらそのトレーニングマシーンを使って懸命に両足を動かしていた。私はいつもこのおじさんのトレーニング風景を眺める。

「今日もやってる」と私は思わずつぶやいた。このおじさんの中にも、克己と健全な自己批判の精神が宿っているのだろう。

彼が一体何を目的に、どれだけトレーニングをしているのかは定かではない。しかしながら、その中年男性と私との間には共通するものが多分にあるだろう。

そのおじさんのトレーニング風景を歩きながら眺めた後、大抵私はまた走り始める。身体が動くのだ。それはおそらく、自己の内側の感情が動かされたからに他ならない。

オフィスの窓から外を眺めると、今日はとても穏やかな冬の一日に思える。確かに木枯らしは吹いているようだが、それでも太陽の優しい光を見ていると、冬の平穏さを感じる。このような日は、両手をいっぱいに広げて、この広大な世界そのものと同一化したいというような気持ちになる。

昨日、オンラインで講演をさせていただいた時、一人の聴衆の方から私も驚いてしまう質問を受けるという幸運を得た。それは、私自身と世界との境界線の溶解を示唆する質問であった。おそらくこれまでの私は、徹頭徹尾、強靭な自己を構築するプロセスの最中にあったのだと思う。もしかすると、

それはまだまだ続くことなのかもしれないが、今はそうした衝動は弱まっている。キーガンの発達理論にせよ、クック=グロイターの発達理論にせよ、ウィルバーの発達理論にせよ、自己を超越する段階に至るためには、点として究極的な自己に至ることが必須の要件となる。

脆弱な自己を超えることは容易であり、それは真の意味での自己超越でもなんでもない。困難なのは、究極的な一点としての自己に至ることであり、そこからその一点を超えていくことなのだと思う。

数学空間において、点は面積を持たないため、存在していないとも言えるし、存在しているとも言える。そうした点としての自己を超えていくのかがどれほど難しいかは想像に難くない。

繰り返しになるが、私はおそらく究極的な点としての自己に向かう道をこれからも歩み続けながらも、同時にそれを超越していく方向に向かっていくのだろう。今日という新たな一日が大きな手を広げて自分を出迎えているかのような感覚が、その方向性の正しさを暗に示している。フローニンゲン：2018/3/2（金）10:27

No.829: 9th Day of the Internship

I'll work on the data analysis with a different quantification criterion than that I applied last week. Today, I'll apply the criterion of stop words such as "a," "and," "you," and so on.

I had a problem with R codes last week when I tried to apply the criterion. The first task today is to solve the problem. Once I solve it, it will be not so difficult to conduct a data analysis because I can utilize the same analytical procedure that I used last week. I hope to finish the second analysis by the end of today. If I complete it early, I'll start to write a short report for the results of the analysis. Groningen, 09:51, Monday, 3/5/2018